

## 第41回 高知女子大学看護学会 メインテーマ『看護を可視化する方略』

### ワークショップ1

#### 子どもの看取りに直面した家族を支える看護の可視化 ～実践－研究からケアガイドラインを創造する～

コーディネーター：益守かづき（久留米大学）

話題提供者：高谷 恭子（高知県立大学）

星川 理恵

（高知大学医学部附属病院 家族支援専門看護師）

子どもの救命が叶わず、子どもの看取りに直面することは、家族にとってそれまで体験したことがないような危機的状況といえます。その状況の中において、家族はさまざまな意思決定を求められますが、情緒的に大変不安定な家族にとって何かを決定するという事は容易なことではないでしょう。同時に、看護師にとっても、このような危機的状況にいる家族への看護の経験知を蓄積することが困難であります。そこで、実践の場面を振り返り、子どもの看取りに直面した家族を支える看護を明らかにする研究に取り組んでいます。

このワークショップでは、子どもの看取りに直面している家族を支える看護の現状と課題、家族看護の実践例について話題提供者の方から話をさせていただく予定です。緊迫している場面における看護を紐解き、同様の場面における看護のあり様を参加者の皆様が可視化できるような機会にしたいと考えています。

### ワークショップ2

#### 地域の健康課題と看護支援を可視化する方略 ～大学と行政の協働による取り組み～

コーディネーター：時長 美希（高知県立大学）

話題提供者：廣末 ゆか（高知県中芸広域連合 保健福祉課）

地域の保健活動においては、地区診断という方法を用いて、健康課題を明確にし、看護支援を計画的に実施しています。しかしながら、課題を明確にするプロセスや検討した看護支援の構造、それに伴う保健師の思考・判断、それらを共有する方策などについては、十分に検討し明らかになっているとはいえません。

ワークショップでは、中芸広域連合と高知県立大学が協働で取り組んだ事業のプロセスと内容を報告し、その取り組みのプロセスにおいて、「地域の健康課題と看護支援」をどのように可視化したのか、について話題提供します。大学からは、事業として取り組んだ調査方法、データ分析方法、地域課題と支援に関する分析結果の概要、実践現場との共有の方法等について報告します。また、実践現場からは、分析結果の活用方法と実践への貢献の成果と課題について報告します。そして、参加者の皆さんと一緒に、地域の健康課題と看護支援を可視化する方略について、またそのために大学と行政がどのように協働していくことが出来るのか、について検討したいと考えています。

### ワークショップ3

#### 看護をつなぐ急性期病院の取り組み ～せん妄ケアに焦点を当てて～

コーディネーター：大川 宣容（高知県立大学）

話題提供者：井上 和代

（高知赤十字病院 急性・重症患者看護専門看護師）

福田 亜紀

（高知医療センター 精神看護専門看護師）

急性期医療の現場で、看護をつなぐために部署を超えて活動するお二人の専門看護師を話題提供者にお迎えして進めてまいります。

せん妄は、身体的な原因から生じる脳の機能不全の状態です。その症状の多彩さからも現場の看護師を悩ませています。「予防が第一」と言われるせん妄ケアは、入院・治療の開始時点から発症のリスクをアセスメントし、せん妄の要因を取り除くことが重要とされます。しかし、多様な症状があり発症メカニズムも複雑、ケアの成果も見えにくい…など、せん妄ケアは、スタッフの疲弊も招きます。せん妄ケアのガイドラインやスクリーニングツールを活用している施設はまだ少なく、それぞれの看護師個人に委ねられている現状があることも事実です。せん妄ケアにおいてせん妄を評価することの重要性は認識していても多忙な業務の中で日常的に活用することの難しさもあります。せん妄は、入院中だけでなく、退院後のQOL、生命予後まで長く影響を及ぼすことや、患者本人にとっても苦痛を伴う体験であることが報告されています。

せん妄のメカニズムは未だ完全には解明されていませんが、関連因子を整理してせん妄を捉え、介入方法を考える取り組みも行われています。リスク評価からトータルに患者を見て、せん妄ケアをチームで展開していく取り組みについて、お二人の話題提供者からお話いただき、看護を可視化し、つないでいくということについて皆様と一緒に考える機会にしていきたいと思います。

## ワークショップ4

### 身体抑制の調査に対する取り組みから

コーディネーター：小笠原麻紀

(高知大学医学部附属病院 精神看護専門看護師)

話題提供者：関 正節 (高知医療センター)

野村 陽子 (高知県立大学 老人看護専門看護師)

身体抑制(拘束)とは、「医師の指示を実施する過程を阻害する行動がある」、あるいは「転倒や転落事故の危険性がある」という理由で、患者様を抑制帯、ミトンなどの道具を使用してベッドや車椅子に縛ったりすることをいいます。看護師は、患者様の人権を侵害するものとして身体抑制を「してはいけない」と思いつつも「生命と安全を守るため」「看護師不足のため」「緊急でやむを得ない状況だから」などの理由で、悩みながら身体抑制を行っている現状があります。また、身体抑制を実際に行うのは看護師であることが多く、他の職種の意識が高まりにくい状況もあります。

ワークショップでは、急性期病院の身体抑制の実態と看護職員の意識調査の結果を発表していただき、それから参加者の皆様が所属している施設の状況や課題について話し合いたいと思います。解決方法を見つけることは難しいのですが、「仕方ない」とすぐさま身体抑制をするのではなく、それに代わる方法を検討し、「やむを得ない状況」をなくすために看護師として「何ができるか」を、ぜひ一緒に考えてみませんか。

## ワークショップ5

### 効果的な糖尿病教育プログラムを目指して ～支援の可視化とチームでの共有化～

コーディネーター：内田 雅子 (高知県立大学)

話題提供者：尾崎 みづほ

(高知赤十字病院 糖尿病看護認定看護師)

糖尿病ケアにおいては、以前から患者を中心としたチーム医療の必要性が認識されています。当院の糖尿病教育入院では、集合教育と個別指導をミックスした内容で患者教育を行い、チームカンファレンスでチームでの関わりの方向性を検討しています。患者にチームで効果的な支援を行うには、細やかで個別的な支援がチームで共有され、チームの力を促進させていくことが重要です。そのためには日々の支援を可視化し、多職種と連携しながら支援の方向性を共有していくプロセスが重要です。看護師は患者に一番近い存在であり、またチーム医療の中ではファシリテーターやコーディネーターという重要な役割を担っています。効果的なカンファレンスの運営や個別的な支援を可視化していくにはどのような工夫が必要なのでしょうか。チーム医療の中での看護師の役割とその技について参加者の皆さんと経験知を共有し、効果的な糖尿病教育プログラムについて検討したいと思います。

## ワークショップ6

### 看護の実践を語ることで気づく自己の成長

コーディネーター：小澤 若菜（高知県立大学）  
下元 理恵（高知県立大学）  
話題提供者：納 万貴（高知大学医学部附属病院）  
前田 佳子（高知大学医学部附属病院）  
森沢 葉月（高知医療センター）  
横山 彩（高知医療センター）

看護職者は、人間そのものに関わり合うことが重要であるため、日々の経験から学ぶことが大切になります。そして積み上げてきた経験を振り返り、自分自身を省みることは、次の看護実践へとつながり、専門職としての成長へとつながります。

ワークショップ6では、卒後2～3年目の4名の話題提供者の方々に、これまでの看護実践から、自らの成長につながったと考える印象深い出来事や学びについて語っていただきます。話題提供者の語りを通して、参加者も自らの成長に気づき、その成長を実感できる機会とし、それらを共有できる場にしたいと考えています。

また、4月から看護職の道を歩み始めた新任看護職の方々とも交流をはかりながら、不安や戸惑いなどもありながらの体験を共有することで、これからの思い描く自らの姿について一緒に考えていきましょう。

## ワークショップ7

### 特別支援学校における災害の備えへの介入研究 ～行政機関との協同・連携の重要性～

コーディネーター：畦地 博子（高知県立大学）  
話題提供者：加藤 令子（共立女子大学）

このワークショップでは、午前中、『看護の可視化がもたらすもの—災害時の要配慮者を対象としたパッケージ開発の研究から見えてきたもの』というテーマでご講演いただいた加藤令子先生に、看護を可視化する研究方法という視点から話題提供を行っていただきます。加藤先生の研究では、何段階にも積み重ねられた研究プロセスの中で、実際にはなかなか難しい行政機関を巻き込んで行った介入研究も実施されています。このワークショップでは、加藤先生に、研究の体験談やノウハウについてざっくばらんに語っていただくと同時に、参加者のみなさまの研究の体験やノウハウについても共有できればと思っております。たくさんの方の体験やノウハウを共有することを通して、看護の可視化を実現する研究の方略について、ヒントをえていただけるものと考えております。